沖縄戦史二作

『ひめゆり戦史
いま問う国家と教育』
『空白の戦史
沖縄住民虐殺35年』

森口豁ディレクター

1979年日本テレビ系「ドキュメント'79」で放映／カラー／48分

1980年日本テレビ系「ドキュメント'80」で放映／カラー／25分

すくなくともある世代にとって「ひめゆり学徒」といえば、何を措いてもまずスクリーンイメージとして存在している。映画の細部には、投降しようとする「ひめゆり」を背中から撃つ日本兵が登場しないわけではない。が、若くして国に命を捧げた乙女たちの悲劇という期待の地平において、結局のところ彼女らの至純は日本軍の至純に重ねられていったように感じられる。

森口豁の『ひめゆり戦史』は、こうしたイメージの堆積に抗して撮られた論争的な映像といっていい。彼女らはみずから進んで命を捧げた、という。だが、八重山の親元に帰っていた生徒は学校に戻らなければ卒業証書は出さないという矢の催促を受け、師範の生徒は四年分の給費を返却しないなら疎開は許さないと恫喝された。別の生徒は、人間性を失った日本兵の「獣欲」に脅かされ通したという証言を残した。彼女らはいったいどのような根拠があって動員されたのか。

圧巻は当時の学校幹部へのインタビューである。このシーンは、ランズマンの『ショアー』が元SS伍長を盗み撮りにした場面や、熊谷博子の『三池』で、労組の切り崩しに奮戦したもと労働課長の表情が第二組合の資金の出所を尋ねられた瞬間に笑顔のままで固まった場面など、ドキュメンタリーの本来業務ともいうべきいくつかの重要な場面を連想させる。映像はこうした場面で事件となる。

沖縄戦での住民虐殺を取り上げた『空白の戦史』も、やはり映像的事件と呼ぶべき作品である。

ノモンハン、中国戦線、そして沖縄戦を経験した元日本兵が、懐古ではなく謝罪のために沖縄を再訪する。それ自体がすでに希有な題材というほかない。元兵士は、スパイとみなされ殺害された男性の遺族の家を訪ね、食卓を間において対面し、そのとき何が起こったのかを確認する。謝罪の可能性、あるいは不可能性が、ともにこの映像のうちで問われている。私たちは「標準語を使わない人はスパイとみなし処分する」という命令がはっきりと記された文書をはじめとして、映し出された数々の事実に驚くが、それと同時にこのドキュメンタリー自体が引き起こしている事件の力に驚かされる。（佐藤泉／63年生。日本近代文学史）＊森口豁著『復帰願望』――昭和のオキナワ』（海風社）にシナリオ収録。